

第 234 回 江東区の柳檜悦像と港区のアンリー・デュナン像と佐野常民像

筆者：林 久治（記載：2023 年 5 月 2 日）

（1）前書き

私（筆者の林）は [Random Walks（乱歩）](#) という題名で [偏屈老人（林久治）の気促な紀行文](#) のサイトを始めている。私の紀行文では、通常の紀行文にはない、斜め目線からのご紹介を書くことに拘りたいと思います。通常の紀行文に関しては、既に優れたサイトが沢山ありますので、それらをも引用しつつ、ユニークなご紹介を記載することに心掛ける所存です。

一方、私は日本の銅像探偵団 ([1\) のサイト/](#)) の銅像探索に参加している。私は珍しい銅像を探して、探偵団の団長さんに「ギャフン！」と仰っていただけることを目標としている。ここで「珍しい」とは、「①見つけ難い場所に隠れている有名人の銅像。②市井で頑張って人生を過ごしたが、有名人ではない人物の銅像」と言う意味である。私は自宅が東京にあり、孫達が大阪にいますので、主として東京近郊と近畿地方で銅像探索を行っている。最近、私はネット記事を丹念に調査し、そのような「スクープ銅像」の候補を多数見つけている。

武漢肺炎による自粛生活で家に籠っていると、運動不足で体重が増加するし、精神的にも圧迫を感じる。私の銅像探索は不要不急の活動ではなく、私の生存に必要な不可欠である。昨年の 7 月は、第 7 波と猛暑のため、私は銅像探索をしばらく自粛していた。しかし、大阪在住の 3 人の孫達は夏休み前に感染したが軽症であった。そこで、私は 9 月初旬に大阪に行き、近畿の銅像を探索した。東京に帰ってから、運動を兼ねて銅像探索を続けている。私の銅像探索記の全ては、[2\) のサイト/f](#) から閲覧出来ます。

私は 3 月 21 日から 31 日まで、大阪に滞在し孫達の世話をした。その間に、銅像探索も少しは出来た。[227 回の記事/f](#) では、その中から大阪市の弘世像の探索記を記載した。[228 回の記事/f](#) では、茨木市の奥田光像の探索記を記載した。[229 回の記事/f](#) では、京都市の田辺朔郎像の探索記を記載した。[230 回の記事/f](#) では、大阪市中央区の林市蔵像の探索記を記載した。

私は 4 月 14 日に渋谷区の日晨上人像を探索し、4 月 22 日には板橋区で日晨上人像を探索し、それらの探索記を [前回の記事/f](#) に記載した。私は [3\) のサイト/1](#) で、柳檜悦像が台場にある海上保安庁海洋情報部の海洋情報資料館にあることを知った。本像は [1\) のサイト/](#) に収録されていないので、私は 4 月 28 日に本像を探索した。その帰りに港区大門に寄り、日赤本社の佐野常民像とアンリー・デュナン像を探索した。両像は [1\) のサイト/](#) に収録されているが、新規情報を探索した次第である。本稿は以上の 3 像の探索記である。なお、本稿では私の意見などを **青文字** で、資料の内容などを **緑文字** で記載する。

（2）台場の柳檜悦像

4 月 28 日、私は池袋駅から「りんかい線」に乗り、国際展示場駅で「ゆりかもめ」に乗り換えて、テレコムセンター駅に着いた。本駅の周辺地図を次ページの図 1 上に示す。本駅の前には巨大な「テレコムセンター」のビルがあり、その前を矢印の方向に歩き、右に曲がると「海上保安庁海洋情報部青海庁舎」のビルがあった。本庁舎の写真を図 1 下に示す。



図1. 上：テレコムセンター駅の周辺地図、下：海上保安庁海洋情報部青海庁舎。

本庁舎の1階に海洋情報資料館（江東区青海2-5-18、以後は本館と書く）があった。本館の玄関を次ページの図2上に示す。本館に入ると内部には小じんまりとした展示室が数室あり、先着の見学者は無く、職員らしい老人が一人居ただけであった。私は「海上保安庁の人はおっかないかも」と心配しながら、彼に「ここの銅像の写真を撮ってもよろしいでしょうか」と尋ねた。彼は予想に反して愛想よく撮影を許可して、銅像の場所まで案内して下さった。そこは、海図の展示室の一角であった。彼は親切にも「ここの部屋は撮影自由です」と言われた。



図2. 上：海洋情報資料館の玄関、下：銅像の設置コーナー。

銅像が設置されていた一角の写真を図2下に示す。当室には多数の海図が展示されていたが、私は「国家機密である海図の撮影を許してよいのだろうか」との疑問を持った。展示品を見れば、明治時代の海図ばかりなので、「歴史的資料と見なせば撮影自由でも支障はないのであろう」と思った。多数の美術館や博物館では、展示品は撮影禁止となっているので、本館の撮影自由の方針に好感を覚えた。

海上保安庁海洋情報部の HP ([4](#)) の[サイト/1](#)) には、本館が次のように紹介されている。

海洋情報部は 1871 年の創設以来、航海の安全に必要な海図や潮汐表などを提供するとともに、近年では、海洋環境、地震、津波などに関する社会ニーズに対応し、多種多様な調査・研究を行い、さまざまな海洋に関する情報を提供しています。海洋情報資料館には、デジタル機器やコンピューターがなかったころ、どのようにして海の深さや流れ、満ち潮・引き潮を推算していたかなど、当時の海洋調査や海の測量を知ることのできる機器、日本で最初に作られた海図や伊能図模写図などを展示しているほか、最新の海洋情報業務を紹介するパネルを展示しています。このほか、「海図アーカイブ」所蔵目録にあります各種資料の高解像度版の画像閲覧ができますので、どうぞお立ち寄り下さい。



図 3.

左：柳檜悦像、

右：本像台座正面の題字。



図 3 左に柳檜悦像を、図 3 右に本像台座正面の題字を示す。題字には「海軍少将柳檜悦」とあった。なお、本像背面には「朝倉文夫」のサインがあった。本像の周辺には、本像の制作時期を示す情報は無かった。そこで、「柳檜悦像」をネット検索すると、東京芸大のある展覧会に次のような案内文 ([5](#)) の[サイト/1](#)) を発見した。

この展覧会は、台東区と東京藝術大学のそれぞれのコレクションをまとめた 2 部構成となっています。〈Part 1. 朝倉文夫〉は、保存修復工事のため休館中である朝倉彫塑館が所

蔵する朝倉文夫作品の中から、選りすぐりの名品を展示します。（出品リストの中に、次の記載があった：朝倉文夫《柳檣悦像》 1930年 ブロンズ 高41.5cm）

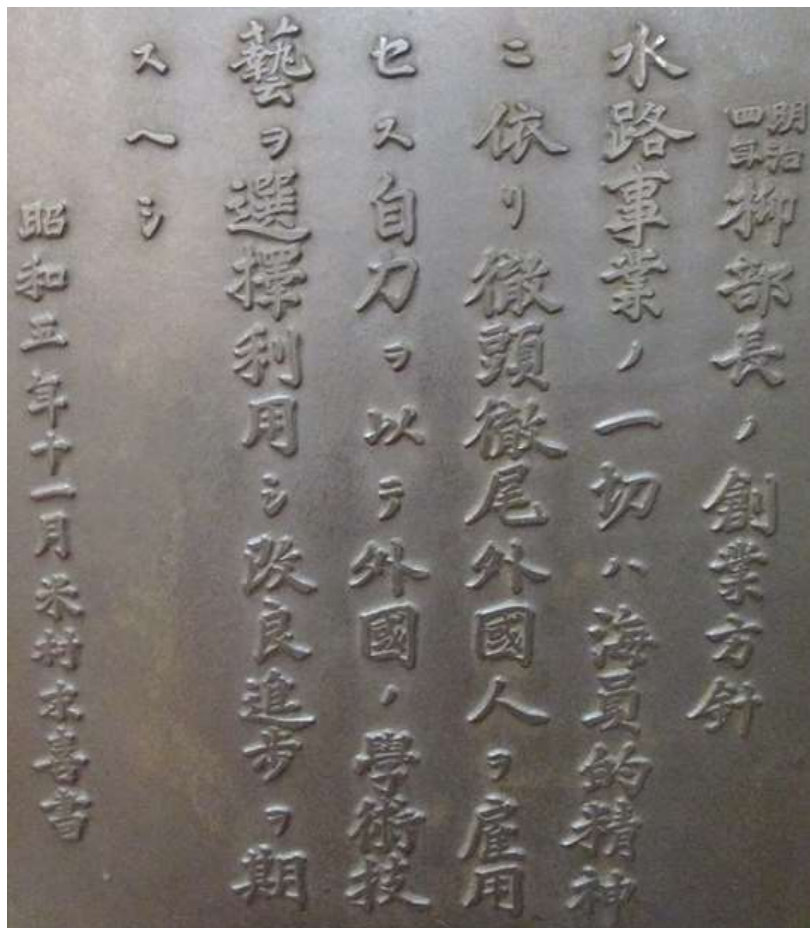
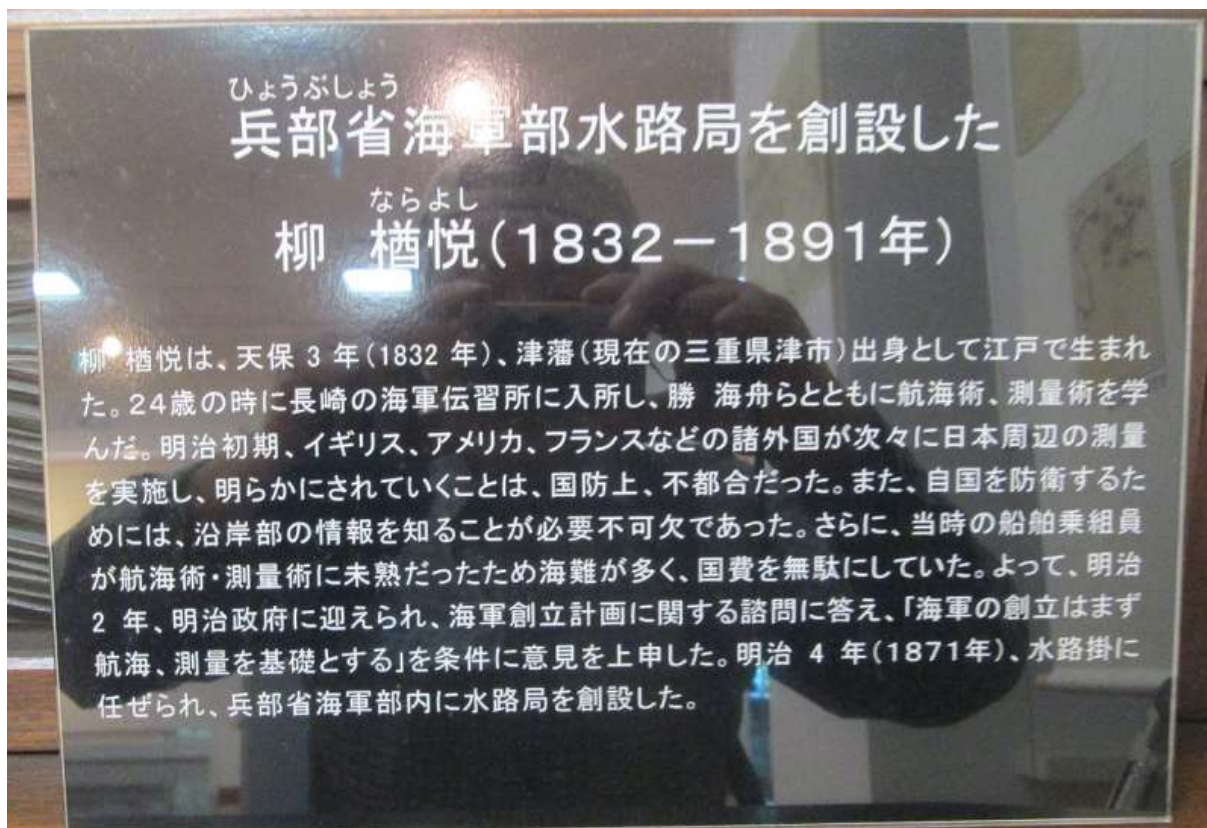


図4.
上：台座正面の銘盤、
下：台座正面の紹介文。



上記の展覧会案内文より、「本像は1930年に制作され、朝倉作品の中でも秀作の一つである」と分かった。図4上に台座正面の銘盤を示す。それには、次のように書かれていた。

明治4年 柳部長ノ創業方針

水路事業ノ一切ハ海員的精神ニ依リ徹頭徹尾外国人ヲ雇用セス自力ヲ以テ外国ノ學術技藝ヲ選擇利用シ改良進歩ヲ期スヘシ

昭和五年十一月 米村末喜書

本銘盤も昭和5年(1930年)と書かれており、「この年に本像が建立された」と推測される。なお、ウィキペディアによれば、米村末喜の略歴は次の通りである。

米村 末喜(よねむら すえき、1879年3月13日 - 1941年12月27日)は、日本の海軍軍人。最終階級は海軍中將。航海術の権威であり、海軍部内で航海の神様と呼ばれた人物である。1925年12月1日少將へ昇進。同時に航海科最高ポストである水路部長に補せられ5年間この任にあたる。

従って、1930年当時の水路部長が上記の銘文を書いたことになる。柳檜悦の経歴は、ウィキペディアや[6\)のサイト/](#)に記載されている。また、[7\)のサイト/1](#)には、海上保安庁海洋情報部の沿革が詳しく記載されている。以上の資料などにより、柳像の概要は次の通りである。

柳檜悦像

設置場所：東京都江東区青海2-5-18 海洋情報資料館1階海図室

制作者：朝倉文夫

製作時期：1930年

設置経緯：海洋情報部は1871年の創設以来、航海の安全に必要な海図や潮汐表などを提供するとともに、近年では、海洋環境、地震、津波などに関する社会ニーズに対応し、多種多様な調査・研究を行い、さまざまな海洋に関する情報を提供しています。海洋情報資料館には、デジタル機器やコンピューターがなかったころ、どのようにして海の深さや流れ、満ち潮・引き潮を推算していたかなど、当時の海洋調査や海の測量を知ることのできる機器、日本で最初に作られた海図や伊能図模写図などを展示しているほか、最新の海洋情報業務を紹介するパネルを展示しています。このほか、「海図アーカイブ」所蔵目録にあります各種資料の高解像度版の画像閲覧ができます。海洋情報部は、以前は築地にあったが2011年にここへ移転した。

柳 檜悦(やなぎ ならよし、1832年10月8日 - 1891年1月15日)は、津藩の小納戸役・柳惣五郎の長男として江戸で出生。近代国家の産声を上げた明治初期の混乱期の我が国において、日本独自の力で1日も早い港湾等の測量を行い全国の海図作成に率先して心血を注ぎました。その功績から「水路測量の父」、「海の伊能忠敬」と称されています。海軍軍人、和算家、数学者、測量学者、大日本水産会幹事長、政治家。三男は柳宗悦(美術評論家)、孫には柳宗理(デザイナー)、柳宗玄(美術史家)、柳宗民(園芸評論家)。

檜悦は、24歳の時に長崎の海軍伝習所に入所し、勝海舟らとともに航海術、測量術を学びました。明治初期、イギリス、アメリカ、フランスなどの諸外国が次々に日本周辺の測量を実施し、明らかにされていくことは、国防上、不都合だった。また、自国を防衛するためには、沿岸部の情報を知ることが不可欠であった。さらに、当時の船舶乗組員が航海術・測量術に未熟だったため海難が多く、国費を無駄にしていた。よって、明治2年、明治政府に向えられ、海軍創立計画に関する諮問に答え、「海軍の創立はまず航海、測量を

基礎とする」を条件に意見を上申した。明治4年（1871年）、水路掛に任ぜられ、兵部省海軍部内に水路局を創設した。

（3）芝の日赤本社のアンリー・デュナン像と佐野常民像

1) のサイト/の旧版には日赤本社のアンリー・デュナン像と佐野常民像が収録されているが、新版には何故か佐野像だけが収録されている。しかし、新版の佐野像にも基本情報が記載されていない。以上の事情により、私は台場の柳像を探索した後、ゆりかもめ線で新橋駅まで行き、都営浅草線に乗換えて、大門駅まで行った。大門駅の周辺地図を図5に示す。



図5. 大門駅の周辺地図

次ページの図6上に、日本赤十字社の本社正門を示す。中央の門柱の向かって左側が車の出入口で、右側が人の通路であった。正門には守衛所はなく、車道側で一人の守衛さんが車の整理をしていた。私はその守衛さんと目を合わせないようにして、人の通路を歩いて本社玄関まで行った。その間、私は守衛さんから咎められることはなかった。

玄関に入ると、1階には広いホールがあった。その写真を図6下に示す。両側の檀上に、胸像が1基ずつ設置されていた。私は「これらが、デュナン像と佐野像であろう」と思った。1階ホールには受付があったので、私は受付嬢に「私は定年退職後、趣味で銅像を研究している者ですが、ここの銅像を撮影しても構いませんか？」と尋ねた。彼女は愛想よく「どうぞ」と快諾して下さった。日赤は公共性の高い会社であり、両像は有名であるので、撮影自由の方針を採用しているのであろう。（本文は、9ページに続く。）



図6. 上：日本赤十字社の本社正門、下：1階ホールに設置された2基に胸像。



図7.
 上左：アンリー・デュナン像、
 上右：佐野常民像、
 下左：デュナン像側面のサイン、
 下右：高田博厚のサイン
[\(10\) のサイト/0](#)。

図6下に、1階ホールに設置された2基の胸像を示す。向かって左側の胸像の題字には「赤十字創始者 アンリー・デュナン 1822-1910」と書かれていた。右側の胸像の題字には「日本赤十字社初代社長 佐野常民 1822-1902」と書かれていた。図7上左にはデュナン像の近接写真を、図7上右には佐野常民像の近接写真を示す。両像には制作者のサインらしき文字が彫ってあった。両像のサインは同じで、デュナン像のサインを図7下左に示す。

両像の周辺には、製作時期の記載は無かった。さて、両像の制作者のサインであるが、私は美術の専門家ではないので、このサインから作家名を同定することは出来なかった。そこで、帰宅後にネット検索をすると、[8\) のサイト/1](#)に次の記載を発見した。

佐野常民像 高田博厚 作：日本赤十字社 蔵

また、[9\) のサイト/0](#)に「福井市美術館収蔵の高田博厚全彫刻作品 175 点のリスト」があり、そこに次の記載があった。

デュナン 1977、佐野 1977

更に、[10\) のサイト/0](#)には「高田博厚のサイン」があった。その写真を図7下右に示す。本サインは、デュナン像のサインと一致していた。以上の資料より、次の事実が判明した。

日本赤十字社の本社に設置されているデュナン像と佐野像の制作者は高田博厚であり、制作時期は1977年である。

赤十字創始者 アンリー・デュナン

1828年5月8日、スイス・ジュネーブ市の旧家に生まれ、幼少の頃より母の影響を受けて博愛精神を培われて育ちました。1859年、旅の途中、イタリア統一戦争の激戦地ソルフェリーノの丘に近いカスティリオーネの町で傷ついた兵士の悲惨な状況を目の当たりにし、町の人々と共に負傷者の手当てに努めました。この時の模様を1862年、『ソルフェリーノの思い出』という本に書き、負傷兵を救うための救護組織を平時から作っておくことと、その活動を国際条約で保障する必要性を訴えました。

この主張が人々を動かし、1863年、各国に赤十字社を設立するための『赤十字規約』ができ、1864年、負傷兵を保護・救済するための『ジュネーブ条約』が締結されました。この功績により、1901年、第一回ノーベル平和賞を授与されました。

日本赤十字社初代社長 佐野常民

1822(文政5)年12月28日、佐賀藩士の下村充賛みつよしの五男として誕生し、のちに藩医佐野常徴つねみの養子となりました。1867(慶応3)年のパリ万国博覧会に佐賀藩から派遣され、会場の赤十字館を見学したことが赤十字との最初の出会いでした。明治維新後は兵部省を経て工部省に出仕し、1873(明治6)年のウィーン万国博覧会に政府から派遣された折りに、再び赤十字の展示を見学し、その発展ぶりに感銘を受けました。また、1875(明治8)年に元老院議官に任命されました。

1877(明治10)年に西南戦争が起り、負傷者が続出しているとの報に接し、わが国においても赤十字と同じ救護組織を創ることを考え、大給恒おぎょうへつ(元老院議官)らと共に博愛社の設立に尽力しました。1887(明治20)年に博愛社が日本赤十字社と改称した時、初代社長に選ばれ、その後も社業の発展のために生涯を捧げました。

図8. 上:

なお、ウィキペディアには次の記載がある。

高田 博厚（たかた ひろあつ、1900年8月19日 - 1987年6月17日）は、第二次世界大戦前から戦後までをフランスで新聞記者として過ごした彫刻家。思想家、文筆家、翻訳家としても活躍した。

デュナン像と佐野像の横には、両氏の略歴書が設置されていた。それらを図8に示す。それらの内容は両像の概要欄に記載する。佐野氏の略歴より「日赤の前身である博愛社は1877年に設立された。その100周年を記念して、1977年に両像が建立されたのであろう」と考えられる。私のこの予想は的中していて、[11\) のサイト/](#)には次の記載があった。

日本赤十字社の旧社屋は、建築家妻木頼黄氏（つまきよりなか）によって設計され、大正元年に完成。現在の本社社屋は、日本赤十字社創立100周年の記念事業の一環として、建築家黒川紀章氏によって設計され、昭和52年に完成。

以上の資料などにより、デュナン像と佐野像の概要は次の通りである。

アンリー・デュナン胸像

設置場所：東京都港区芝大門 1-1-3 日本赤十字社 本社1階ロビー

制作者：高田博厚（1900-1987、石川県出身）

製作時期：1977年（日赤創立100周年記念）

設置経緯：赤十字創始者のアンリー・デュナン（1822-1910）は、1828年5月8日、スイス・ジュネーブ市の旧家に生まれ、幼少の頃より母の影響を受け博愛精神を培われて育ちました。1859年、旅の途中、イタリア統一戦争の激戦地ソルフェリーノの丘に近いカステッオーネの町で傷ついた兵士の悲惨な状況を目の当たりにし、町の人々と共に負傷者の手当に努めました。この時の模様を1862年、「ソルフェリーノの思い出」という本を書き、負傷兵を救うための救護組織を平時から作っておくことと、その活動を国際条約で保障する必要性を訴えました。この主張が人々を動かし、1863年、各国に赤十字社を設立するための「赤十字規約」ができ、1864年、負傷兵を保護・救済するための「ジュネーブ条約」が締結されました。この功績により、1901年、第一回ノーベル平和賞を授与されました。

佐野常民胸像

設置場所：東京都港区芝大門 1-1-3 日本赤十字社 本社1階ロビー

制作者：高田博厚（1900-1987、石川県出身）

製作時期：1977年（日赤創立100周年記念）

設置経緯：日本赤十字社初代社長・佐野常民（1822-1902）は1822（文政5）年12月28日、佐賀藩士下村充賛の五男として誕生し、のちに藩医佐野常徴の養子となりました。1867（慶応3）年のパリ万国博覧会に佐賀藩から派遣され、会場の赤十字館を見学したことが赤十字との最初の出会いでした。明治維新後は兵部省を経て工部省に出仕し、1873（明治6）年のウィーン万国博覧会に政府から派遣された折りに、再び赤十字館を見学し、その発展ぶりに感銘を受けました。また、1875（明治8）年に元老院議員に任命されました。1877（明治10）年に西南戦争が起こり、負傷者が続出しているとの報に接し、わが国においても赤十字と同じ救護組織を創ることを考え、大給恒（元老院議員）らと共に博愛社の設立に尽力しました。1887（明治20）年に博愛社が日本赤十字社と改称した時、初代社長に選ばれ、その後も社業の発展のため生涯を捧げました。

参考資料

- 1) のサイト : <https://douzou.guidebook.jp/>
- 2) のサイト : <http://masaniwa.web.fc2.com/Ranpo.pdf>
- 3) のサイト : <http://ki43.on.coocan.jp/injapan/heiki8/suiro/suiro.html>
- 4) のサイト : <https://www1.kaiho.mlit.go.jp/info/kokai/kokai.html>
- 5) のサイト :
<https://museum.geidai.ac.jp/exhibit/2010/04/collection2010sp.html>
- 6) のサイト : <https://www1.kaiho.mlit.go.jp/kaizuArchive/chief/>
- 7) のサイト : https://www1.kaiho.mlit.go.jp/info/jhd_history.html
- 8) のサイト : <http://www.nagaoka.jrc.or.jp/kids/s016.html>
- 9) のサイト : <http://www.art.museum.city.fukui.fukui.jp/gallery.html#nogo>
- 10) のサイト : <https://aucfree.com/items/e350943660>
- 11) のサイト : https://www.nisseki-service.com/e-commex/cgi-bin/ex_disp_item_detail/id/9462/